

偶然が重なって……

『赤い翼：パリ―東京』実行委員会 副会長、軽井沢朗読館館長 青木 裕子

今から50年前の愛知県名古屋市。23歳の女性二人が、とあるアパートの三階の隣同士になりました。一人はフランスからやってきたばかりのジェニー。もう一人はNHKの新人アナウンサーで、東京から来たばかりの私。お互いに見知らぬ土地で他に友達もなく、言葉も通じないのになぜかとても親しくなりました。それから40年近くの歳月が流れ、相変わらず仲良しの二人は、ある日電話でこんな会話を交わしました。

朗読劇「アンドレの翼」、ジャピーの故郷で上演

「ユウコさん、私の親戚にアンドレ・ジャピーというフランスの冒険飛行家がいたのです。小さいころ、お母さんに聞いた話を思い出した。ユウコさん、もうすぐ定年退職だと言っていましたね。フリーになったら二人でフランスに行って、アンドレ・ジャピーのことを調べて、物語を作って、それをヨーロッパの人たちに読んで聞かせましょう」と。

うっかりジェニーの誘いに乗って、二人でフランスのボークールに行き、最初に会ったのがセドリック・ペランさん、当時の若きボークール市長でした。それがいまから13年前のこの写真です(図1)。ボークールはフランスの名家ジャピー家の城下町といった趣で、かつて機械工業で栄えた薔薇の花が咲き乱れる美しい町です。

次の年の2013年秋、ジェニーと私は出来上がったフランス語と日本語が交互に出てくる物語を抱え、パリとボークールで朗読会を開き、ジェニーの夢をかなえたのでした(図2)。100時間冒険飛行の最後の行程で、九州の脊振山で遭難したアンドレ・ジャピーが村人たちの懸命の捜索で救出され、4か月にわたる九大病院での療養で回復し、フランスに無事帰国した友情の物語をフランスの人たちは初めて聞く驚きをもって大きな拍手を送ってくれました。

秋にはパリとボークール再訪、よりビッグな舞台に

フランスに来るのに一つの奇跡が起こったことを申し上げねばなりません。当時、スタッフを連れての朗読会の渡航費など出せるはずもなかった



図1 ボークール市役所の市長室で、左から私、ジェニー、ペラン市長(2012年6月)

のですが、あちこち補助金申請したうちの一つ、笹川日仏財団の渡辺昌俊さん(現・『赤い翼』実行委員会事務局長)がニコラ・ジャピーさん(アンドレの親族)の友人で、渡辺さんは申請書を見てすっかり驚いたそうです。「昔、ニコラからそんな話を聞いたことがある……」と。ここにも友情が見つないだ偶然がありました。

フランスから戻って2014年は、日本での凱旋朗読会で佐賀県神埼市をはじめ全国11か所をまわりました。渡辺さんに誘われて日本に来たニコラさんは、神埼市の人たちがいかに大切に日仏友情の物語を守り伝えて来たかにまたまた大感激。90年前、アンドレ・ジャピーの果たせなかった夢の実現に向けて、赤い翼プロジェクトのスタートが切って落とされたのでした。さて今年の9月19日はパリで、21日はボークールでこの物語がビッグな舞台となって上演されます。そして来年は日本に来る！まさかまさか本当に当時のコードロン・シムーンが復元され空を飛ぶ日が来るなんて、ジェニーも私も夢のように思うのです。



図2 ボークール市での「アンドレの翼」上演では、ペラン市長が相手役を務めてくれる場面もあった(2013年9月)